

おかやまコープとわたし（生涯、組合員で）

鹿角 千世子

五十年余り前のことです。夫の転勤により県外の団地に住むことになった私は、同じ棟の人の誘いで生協の組合員になりました。二才児と乳児がいて、安心できる食品が欲しかった折、まさに渡りに舟の思いでした。

果汁百パーセントのオレンジジュースと、合成の着色料・保存料・甘味料の入らないお菓子がわが家の定番でした。段ボール箱のタマゴは班の皆で分け合い、荷分け後は子ども達を遊ばせながらの子育ての話や世間話。昔の井戸端会議のようなものです。

団地は地元出身者が多く、転勤組の私は気をつけて控え目に暮らしたはず、でした。ところが気がつけば、皆さんの輪の中で何の気遣いもなくおしゃべりし笑っていたのです。子どもも同様でした。岡山弁を笑われてベソをかいていた長男は、同じ年ごろの友達ができ、生き生きと遊ぶようになっていました。

安全な食品。親しみある人々。生協のつないでくれたご縁を、つくづくありがたく思ったものでした。

三年後、岡山へ帰りました。自宅は現在の岡山市北区加茂。すぐに最寄りの生協を探しましたが、この時加茂は未組織でした。

生協の商品が欲しい。何とか加茂に生協班を作れないものか。当時幼稚園に通い出した子どもの、お母さん仲間と何度も話し合い、程なく誕生したのが加茂一班です。岡山市民生協倉敷東部支所の所属であったと思います。

順不同ですが、にがりと国産大豆使用の充てん豆腐、缶入りミックスキャロット、よもぎおかき、国産小麦使用食パン、コープ化粧品等、生協は商品を次々に開発。岡山独自の産直豚、産直牛、産直野菜等の取り組みも進み、商品数は格段に増えていました。

「今日、生協来た？」。帰宅した子どもの第一声です。どんなおやつが届いているかな、とワクワクしながら帰ったのでしよう。生協の来る日が楽しみ―組合員の家庭の子に共通した思いだったようです。

「加茂一班」は後に発展的解消し、欠番となりましたが、後に幾つも結成された「加茂〇班」の母体となりました。その名を惜しみ、私は密かに「栄光の加茂一班」と名づけています。

昭和五十年代、子ども達は小学生になりました。春の身体検査の前日、私は真新しい下着を用意しました。長女には、入学後初めての身体検査でした。

当時子どもの間でアトピー性皮膚炎が増え、過度に漂白された衣服もその一因か、と指摘されていました。対策として生協からは洗濯用粉石けんが販売され、安全性の高い無漂白下着が開発されました。わが家でも発売と同時に購入し使用していたものですが、この日用意したのも、この下着でした。

難点をいえば、新しい品でも相当に着古したかに見えるキナリ色の強さです。これに少しの危惧を覚えました。これほど安心な下着はないのだからと、母の一念を通しました。

さて翌日のこと、帰宅するなり長女は、必死の表情でこう訴えたのです。

「わたし、かぼちゃパンツはいやだ」

かぼちゃパンツ—そうです、女子用の無漂白パンツというのは、昔の体操服のブルマー型ふんわりふくらんで、まさにかぼちゃの形でした

「みんなのはね、テレビでやってるマンガの絵がついていて、かわいかったんだ」

あっそうだったんだ、と私はやっと解りました。女児の下着は、スマートなショーツで流石のマンガの絵がついていたんだ。きっと友達で見せ合って「○○ちゃんの絵、かわいい」とか言っってはしゃいだんだね。ところがあんたのはどってりしたかぼちゃ型だし絵もついてない。おまけに黄ばんだみたいな色だものね。皆の輪に入れなかったんだ。辛かったよね。

「かぼちゃパンツ、当分やめようか」

生協大好き娘の、たった一度の否でした。

どんなに体に良い物でも、心の快適さや満足感を度外視しては成り立ちません。親の安心感を優先させることの危うさを、このできごとに教えられました。

その後、注文書に無漂白下着を見る度、心の中で「ごめんなさい」を言ったものです。昭和初期の雰囲気を持ったこの下着に、どこかシンパシーを感じていたのでしょう。

ところが間もなく、無漂白下着は注文書から消えてしまいました。わが家と同様のやり取りが、全国の幾つもの家庭で繰り広げられたのかもしれない。

子どもの手が離れた数年間、機関紙委員として「くらしとなかま」の誌面作りに関りました。「虹の宴」の酒造場、印南養鶏場、瀬戸田レモン等々を訪ねたり、企業や組合員の商品開発の場も多く取材しました。そして一つ一つのどんな商品にも、商品化に至るまでの試行錯誤があることを識りました。組合員に安心して使用してもらえるものを生み出そうとする、苦心の軌跡がありました。それらは貴重な体験として今も心に息づいています。

この五十年において開発されたすばらしい商品達、また利用が伸びず姿を消した数々の商品達と、その開発者に、心からのオマージュを送ります。

その後、岡山市民生協は「おかやまコープ」と改称。組合員は拡大、商品も増加の一途をたどっているようです。コープの取り組みは、日本の食品の在り様を牽引し大きく変える原動力ともなったのではないのでしょうか。

コープ大好き二世。コープ商品が当たり前の三世。今後の歩みは創成期と違った展開になるのかもしれませんが。けれども、子どもに安心安全の食と、平和な世界を願う、世の親の思いは不変であり、コープの立脚地でもあることに違いはありません。

コープの存在は、私の人生に多くの喜びを運んでくれました。今、高齢期に入った私はこんなふうに願っています。

生涯、組合員でいたいーと。